

私の一文字「人」

副代表幹事
企業経営委員会 委員長
富山 和彦

経営共創基盤
代表取締役CEO



より人が幸せになる企業再生を

4月号から始まった、会員の方が思いを込めて選んだ「一文字」に書家の岡西佑奈さんが命を吹き込む新企画。第2回にご登場いただいたのは、富山和彦副代表幹事です。

岡西 「人」という文字は2画で、立っている人を横から見た形を表現しています。書では大変難しく奥が深い文字です。富山さんはなぜ「人」という文字を選ばれたのですか。

富山 私は企業経営者であり経営が仕事です。企業自体が人の集まり。人が作り、人が営み、人のために会社や事業は存在します。それが然るべく機能するか否かの鍵は「人」である経営者の巧拙にあります。人に始まり人に終わるのが私の経営観であり、仕事観であり、人生観でもあるんです。

岡西 富山さんは経営を天職とおっしゃっていますが、いつ頃からそう思われるようになったのですか。

富山 30代の後半でしょうか。いわゆる戦略コンサルタントの仕事をしていました。1990年に米スタンフォード大学のMBAプログラムに留学して帰ってきた後に、初めて自分が経営する立場で従業員の半分をリストラしなければならなくなりました。その後、デジタルツーカーグループ（現ソフトバンク）の創業にかかわり、サラリーマンとしてさまざまなことをやりました。この経験で、コンサルタント時代には分からなかった経営の奥深さや人間的要素での戦略が理解できました。

岡西 90年代の終わりから再生案件が多く持ち込まれるようになったそうですね。

富山 バブル後の“経営のプロ”が必要だった時代に私がフィットしたのだと思います。人と人の一番ややこしい、かつて私が経験したような仕事がたくさん来りました。大変ですが、再生は人助け。難しくても奥深い問題をなんとか乗り越えようと、明らかに

悲惨な人生を回避できる人たち、むしろ、より幸福になる人が出てくる。そんな体験が重なることで、経営の奥深さ、やりがいを知ったんです。

40代で産業再生機構にかかわったことも大きかったですね。大手企業から地方の旅館まで手掛けました。私は地方の再生を行ううちに、実は地方の生活がリアルで、ウォールストリートやシリコンバレーでグローバリズムと言っている人たちの方がバーチャルなんじゃないかとも思い始めました。その頃からますます経営が面白くなった気がします。

岡西 今のお話を聞いていて、この文字の右払いのどっしりしたところに、富山さんの経営に対する考え方が表現できたのかなと思いました。富山さんの細かいところまで手を差し伸べる優しさと、^{たくま}逞しさを掛け合わせたのですが、そこに経営の持つ人間的要素、いわゆる「人間くさい」面も加えました。

富山 企業の再生という状況は極限状態です。ある意味、本性が出る。私も含めてね。だけど、人が人とのかわり方で本当に感動したり、力をもらえたりするのは本性がお互い出るときなんです。本性において極めて善良なる人とかかわったり、日頃すごくカッコイイことを言っても逃げている人がいるのを見たり。そういう経験を通じて、人を好きになることもあれば、失望することもある。私のような仕事を続ける人間や経営にかかわる人間は、人が好きだったり、人に好奇心を持つ人間なんだと思います。

書家

岡西 佑奈

1985年3月生まれ。23歳で書家として活動を始め、国内外受賞歴多数。現代アート『青曲—そして始まりとしての紅畝』を展開。

